

大林B遺跡・長五郎林B遺跡（第2次） 発掘調査報告

2022（令和4）年2月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、令和2年度に実施した県営かんがい排水事業有爾中・明星地区に伴う大林B遺跡及び長五郎林B遺跡の工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 工事立会調査地は、三重県多気郡明和町有爾中に所在する。
3. 工事立会調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。現地調査から報告書作成に至る経費は、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。
4. 工事立会調査の体制は次のとおりである。

工事立会調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 主査 森川常厚 主任 元座範子
工事立会調査期間 令和2年12月16日～17日（大林B遺跡）
令和3年2月18日～19日（長五郎林B遺跡）
工事立会調査面積 23m²（大林B遺跡）
35m²（長五郎林B遺跡）
5. 現地での図面作成は調査研究1課職員により、写真撮影は工事立会調査担当者による。
6. 本書の執筆は元座及び森川が行い、編集は森川が行った。
7. 本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている（令和3年4月5日三総合地第1号）。調査区位置図に使用した事業計画図は三重県農林水産部の提供による。
8. 本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第VI座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。
9. 土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。
10. 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

I. 前言	(元座範子) ...	1
1. 調査に至る経緯		1
2. 調査の経過		1
3. 調査の概要		1
4. 文化財保護法に関する諸手続き		1
II. 位置と環境	(森川常厚) ...	2
III. 大林B遺跡	(#) ...	6
1. 層序		6
2. 遺構		9
3. 遺物		9
IV. 長五郎林B遺跡	(#) ...	10
1. 層序		10
2. 遺構		10
3. 遺物		14
V. 結語	(#) ...	15

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡地形図	4
第3図 調査区位置図	5
第4図 大林B遺跡調査区平面図	6
第5図 大林B遺跡調査区土層断面図	6
第6図 大林B遺跡構出土遺物	7
第7図 大林B遺跡包含層出土遺物	8
第8図 長五郎林B遺跡調査区平面図	11
第9図 長五郎林B遺跡調査区土層断面図	11
第10図 長五郎林B遺跡出土遺物	12
第11図 昭和23年撮影の空中写真	16

写真図版

写真図版1	大林B遺跡調査前風景
.....	大林B遺跡調査区北半全景
.....	大林B遺跡調査区南半全景
写真図版2	大林B遺跡出土遺物
写真図版3	大林B遺跡出土遺物
写真図版4	長五郎林B遺跡調査区南部全景
.....	長五郎林B遺跡調査区西部全景
写真図版5	長五郎林B遺跡出土遺物
写真図版6	長五郎林B遺跡出土遺物

表目次

第1表 大林B遺跡遺物観察表	7
第2表 長五郎林B遺跡遺物観察表	13

I. 前 言

1. 調査に至る経緯

県営かんがい排水事業有爾中・明星地区の事業は、大林B遺跡を含み、長五郎林B遺跡に隣接する。これらの取り扱いについて三重県農林水産部及び伊勢農林水産事務所と協議を重ねた。その結果、事業に先立ち、確認調査を行ったところ、大林B遺跡の一部に遺構・遺物の包蔵が確認され、長五郎林B遺跡では、遺跡範囲が事業地の一部に拡大することが確認された。この結果を基に、伊勢農林水産事務所と協議を続けた結果、用水管設置時に工事立会による発掘調査を実施し、記録による保存調査を行うこととなった。

なお、長五郎林B遺跡については、明和町と協議のうえ、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更の手続きを行った。また、平成9年度に宮川用水の改修事業に伴い実施された調査を第1次調査とし、今回を第2次調査とした。

2. 調査の経過

調査は大林B遺跡から開始した。調査地の現況が道路であるため夜間の安全確保が必要であり、調査区を分割し、1分割分については、即日調査を終え、埋め戻しまで完了するかたちで実施せざるを得なかつた。

長五郎林B遺跡の調査は、大林B遺跡の調査終了後、工事が長五郎林B遺跡に及ぶまでの2ヶ月間の間隔を空けて開始した。掘削深が2mを超える地点もあり、崩落に留意しながらの作業となつた。

3. 調査の概要

表土及び包含層は重機を用いて掘削を行い、遺構検出・遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は、全体平面図及び土層図を1/20で、当センター職員による手測りで作成した。

写真の撮影には、一眼レフデジタルカメラを用いた。遺構写真是、ニコンD3300で撮影し、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いた。遺物写真是、

ニコンD800Eを用いた。

なお、大林B遺跡については、前述した事情から調査区全体を通じた写真撮影は実施できなかつた。

4. 文化財保護法に関する諸手続き

(1) 県文化財保護条例第48条

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

大林B遺跡

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知
平成30年7月6日付 勢農第3181号

三重県知事あて三重県教育委員会教育長通知
平成30年7月13日付 教委第12-4041号

長五郎林B遺跡

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知
令和2年10月20日付 勢農第3414号

三重県知事あて三重県教育委員会教育長通知
令和2年10月29日付 教委第12-4138号

(2) 文化財保護法第100条第2項

「埋蔵文化財の発見・認定通知」

松阪警察署長あて三重県教育委員会教育長通知

大林B遺跡

令和3年1月12日付 教委第12-4422号

長五郎林B遺跡

令和3年3月17日付 教委第12-4431号

(3) 文化財保護法第95条第1項

「周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」

長五郎林B遺跡

三重県教育委員会教育長及び明和町あて三重県埋蔵文化財センター所長通知

令和3年1月18日付 教埋第265号

三重県埋蔵文化財センター所長あて三重県教育委員会教育長通知

令和3年1月18日付 教委第12-4224号

(元座)

II. 位置と環境

大林B遺跡（1）と長五郎林B遺跡（2）は、200mの間隔を空け隣接して所在する。両遺跡は丘陵地帯の北端部に立地する。この丘陵は玉城丘陵と呼ばれる。巨視的には紀伊山地の一部で、その北東端を構成するものである。西南日本内帯の最南部に位置し、日本列島を東西に貫く中央構造線のすぐ北側である。このため、深層風化を受けた領家帶の花崗岩類で丘陵が構成され、丘頂部の定高性は不明瞭で無数の開析谷が発達する特徴を持つ。当地も東から西へ向けて深い開析谷があり、それが北西方向と南西方向に分かれ、それぞれ開析谷の頂部に至っている。大林B遺跡は、その分岐点に位置し、東面する丘陵裾野の緩斜面で、現在は主に畑として利用されている。長五郎林B遺跡は、北西方向へと枝分かれした開析谷の最も奥に所在する。南東に面した丘陵裾野の緩斜面に位置し、現況は主に畑である。

長五郎林B遺跡の周知は比較的新しく、宮川用水の改修事業に伴う埋蔵文化財の調査で平成9年度に新発見されたもので、土師器の焼成坑等が確認されている。その際に尾根の反対側で從来から周知されていた長五郎林遺跡を「長五郎林A遺跡」（3）、新発見されたものを「長五郎林B遺跡」として整理し、周知されることとなった。さらには今回の調査で、長五郎林B遺跡の範囲が西面の緩斜面に拡大することが確認されている。なお、この遺跡が望む開析谷の奥部には、残土の盛土があり植樹されている。このため、本来の地形が判別し難い状況である。

両遺跡の立地する丘陵には合戦田古墳群（4）や垣場古墳群（5）、長五郎林古墳群（6）の小規模な円墳が密集する。これらを含め玉城丘陵は県内にも有数の古墳密集地帯である。近隣には愛場古墳群（7）、丸山古墳（8）、世古古墳群（9）、天王山古墳群（10）、カゴ山古墳群（11）があり、神前山古墳群（12）の神前山1号墳（13）は、昭和47年の発掘調査の結果、全長40mの造出を持つ帆立貝式前方後円墳であり、周囲を圧倒する規模であることが判明している。明治38年には画文帶神獸鏡の出土も伝えられ、倭王權との直接の関連が考察されている。

古墳は玉城丘陵北方に広がる明野台地にも分布しており、織糸古墳群（14）、塚山古墳群（15）、史跡坂本古墳群（16）、明星古墳群（17）等、多数の群集墳が知られている。なかでも坂本1号墳（18）は、全長38mの前方後方墳で金銅装頭椎大刀が副葬されていた。間接的ではあるが斎宮造営との関係が注目されている。

明野台地には有力な集落跡や官衙等も所在する。史跡斎宮跡（19）は斎王の祭祀を司る特異な官衙として全国唯一のものである。その斎宮への土器供給地として注目される北野遺跡（20）からは、6世紀から8世紀までの200基以上の土器焼成坑が検出されている。この他にも土器焼成坑と工房等の状況が分かる史跡水池土器製作所跡（21）をはじめ明野台地では多数の土器焼成坑跡が発掘されている。近隣には堀田遺跡（22）、戸峯遺跡（23）、古墳遺跡（24）等多数の土器焼成坑を検出する遺跡が密集し、令和3年3月末現在で596基が検出されている。この数値は県内で突出するもので、その平面形態の特徴を勘案すれば全国的に見て例のない地域といえる。

大林B遺跡や長五郎林B遺跡の所在する多気郡明和町有爾中には、神宮土器調製所（25）があり、現在も神宮で使用する素焼きの皿類を製作している。有爾中は古代には「有爾郷」と称される地域で、神宮への土器調進は古代に遡るものとされる。

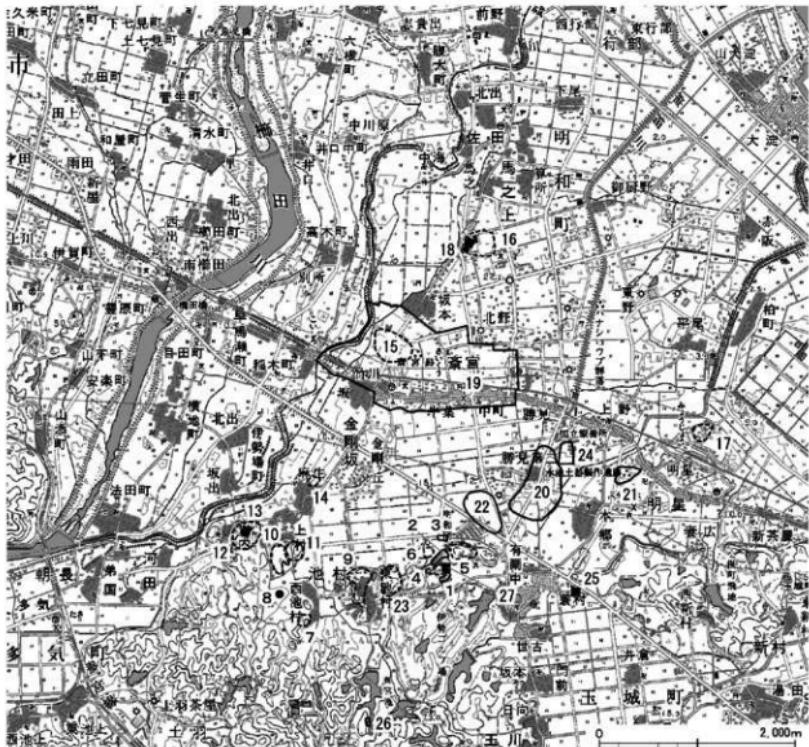
玉城丘陵には、平安時代の大葬墓が良好な状態で発掘された長谷町遺跡（26）も所在する。被葬者は火葬墓を営むことができる特定階層の若い女性とされる。被葬者が特定階層の若い女性となれば斎宮關係者の墓を想定したいところである。しかし、神宮關係の荒木田氏も候補にあがり、特定が困難である。

この様に、この地域は古代より斎宮や神宮と密接な関係にあった地域である。なお、大林B遺跡と長五郎林B遺跡の間に有爾櫻神社（27）が鎮座する。延喜式に記載のある由緒ある神社で、神明造の社殿を構える。天王祭に奉納する天王踊が伝わるが、「宇爾櫻神社かんこ踊り」として明和町の無形民俗文化財に指定されている。

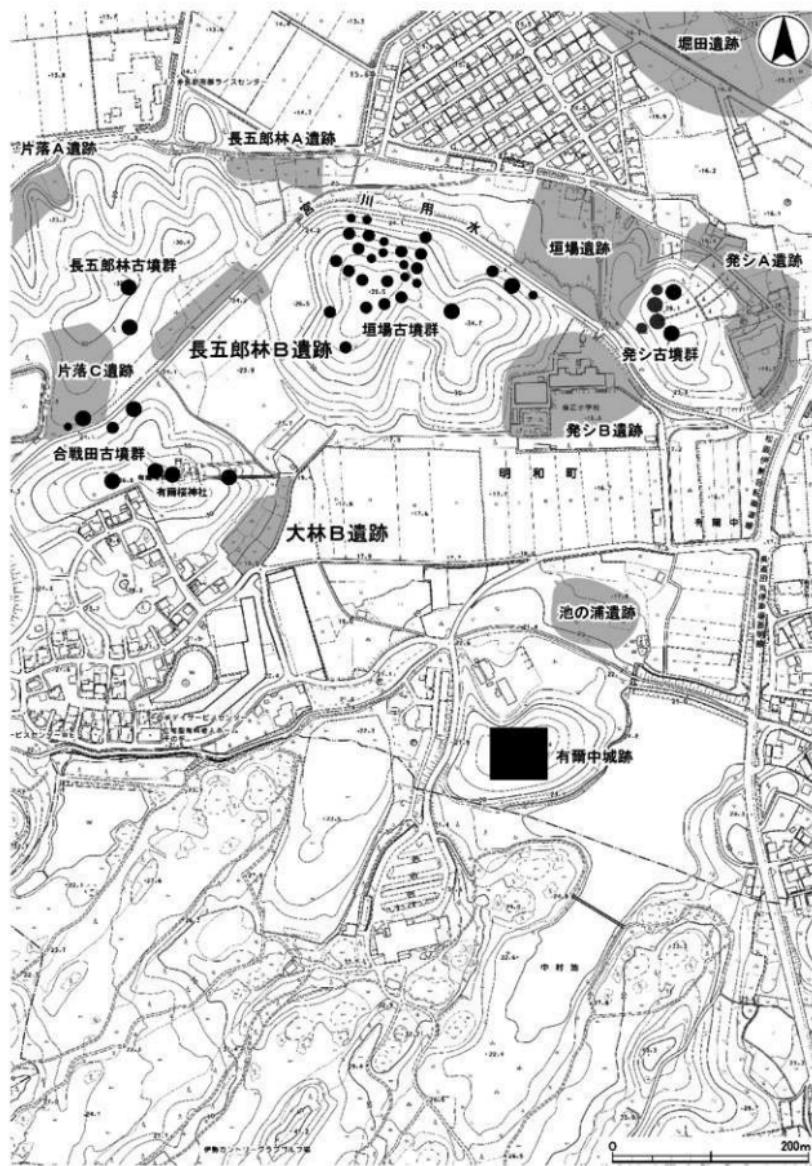
（森川）

[註]

- ① 目崎茂和・岩田修二「I 地形分類」『土地分類基本調査 松阪』三重県地域振興部地域振興課 1991
- ② 小山憲一「長五郎林B遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財調査報告 I 外山遺跡・片落C遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000.3
- ③ 下村良典男「神前山1号墳発掘調査報告」明和町教育委員会 1973
- ④ 乾哲也『坂本古墳群発掘調査報告』三重県明和町 平成29年3月
- ⑤ 上村安生ほか『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995.3
- ⑥ 明和町教育委員会・三重県教育委員会『斎王宮跡 - 広城市町村道路調査 -』1977
- ⑦ 上村安生「明和町北野遺跡の土器工場生産と神宮・斎宮」『瑞垣250』神宮司庁 令和3年秋季号
- ⑧ 小林 秀「中世後期における土器工人集団の一形態 - 伊勢国有尔郷を素材として -」『研究紀要第1号』三重県埋蔵文化財センター 平成4年3月
- ⑨ 小山憲一「長谷町遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 長谷町遺跡・高宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2010
- ⑩ 明和町斎王宮跡・文化観光課による。

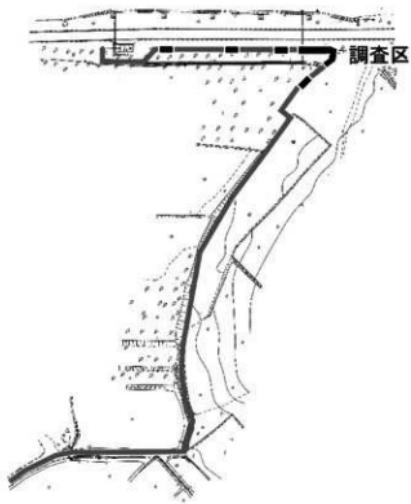


第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」1:50,000より]

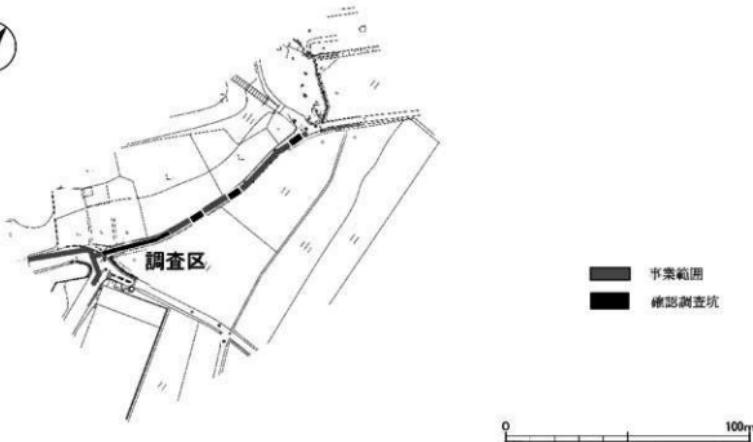


第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

長五郎林B遺跡



大林B遺跡



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

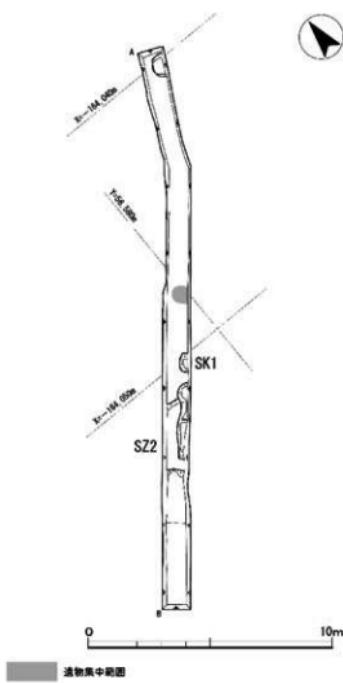
III. 大林B遺跡

僅か23m²の狭小な調査区のこともあり、性格の明確な遺構の検出には至らなかった。しかし、奈良時代の土器器・甕等の遺物が比較的多量に出土している。

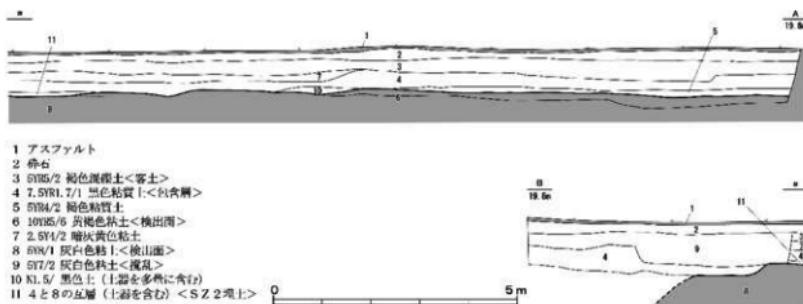
なお、道路であるため夜間の安全確保が必要であり、調査区を2分割し、1分割については、即日調査を完了するかたちで実施している。

1. 層序

現況は狭小な農道で、舗装がされている。したがって、自然の微地形は把握しがたい状況である。表面はアスファルトで、その下60cmまでは、農道整備によるとと思われる造成された客土である。その下に厚さ20~30cmの黒色粘質土層があり、これが包含層である。その下には薄い褐色粘土層があるが、調査区中央部で消滅することもあり、さらに下の黄褐色粘土層上面で遺構検出を行った。アスファルト下約90cm~1mである。この検出面も調査区南部では消滅しており、さらに下層の灰白色粘土上面で遺構検出を行っている。この検出面も調査区南端では深度を深め地表下2m以上に及ぶが、崩落の危険を回避するため完掘を断念した。結局、調査区南端は谷状の地形となり、湧水が特に激しい状態である。

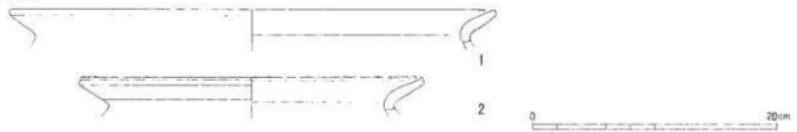


第4図 大林B遺跡調査区平面図 (1:200)

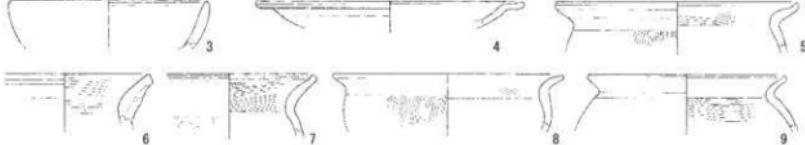


第5図 大林B遺跡調査区土層断面図 (1:200)

SK 1



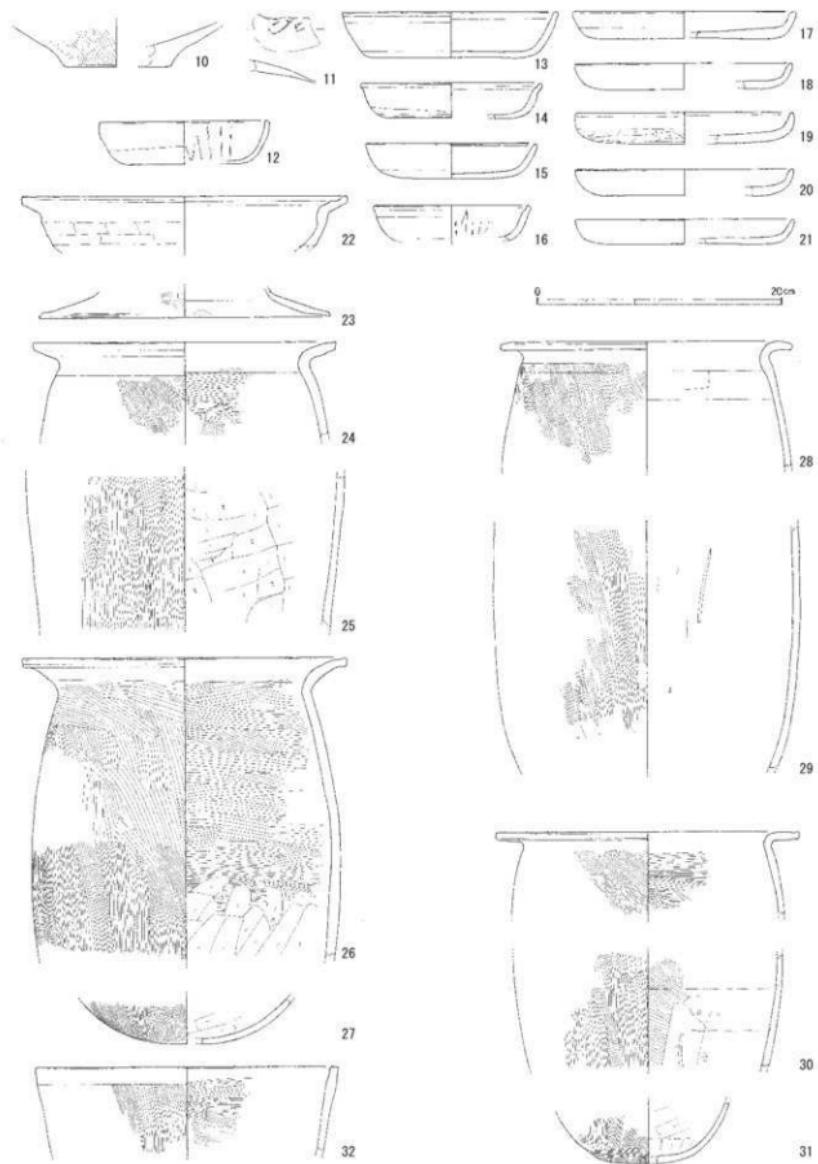
SZ 2



第6図 大林B遺跡遺構出土遺物 (1:4)

番号	測量番号	遺構	測量形	法 目 口幅 深さ その他の特徴	調査法の特徴	色	地土	採取深度	備考		
1	1-1	SK1	土塊器 塊	40.0	—	—	にぶい黄褐色10YR7/4	1mm以下の砂粒含 有	口縁部1/12		
2	1-2	SK1	土塊器 塊	28.0	—	—	にぶい黄褐色10YR7/4	1mm以下の砂粒含 有	口縁部1/12		
3	2-2	SZ2	土塊器 塊	16.0	—	—	にぶい4E7.5YR7/4	1mm以下の砂粒含 有	口縁部1/12		
4	2-3	SZ2	土塊器 塊	22.0	—	—	褐色SYR6/6	黒砂粒含 有	口縁部1/12		
5	2-4	SZ2	土塊器 塊	19.8	—	ハケメ	にぶい黄褐色10YR7/6	1.5mm以下の砂粒含 有	頭部2/12		
6	1-3	SZ2	土塊器 塊	—	—	—	にぶい黄褐色10YR7/4	1mm以下の砂粒含 有	小片		
7	1-4	SZ2	土塊器 塊	—	—	—	にぶい4E7.5YR6/3	1.5mm以下の砂粒含 有	小片		
8	1-5	SZ2	土塊器 塊	18.8	—	ハケメ	にぶい黄褐色10YR7/4	1.5mm以下の砂粒 含 有	口縁部2/12		
9	1-6	SZ2	土塊器 塊	16.2	—	外表面、内面ハケメ	にぶい4E7.5YR6/6	1.5mm以下の砂粒 含 有	口縁部1/12		
10	3-3	包含層 塊	—	直径 8.4	外表面ハケメ	にぶい4E7.5YR7/4	やや精良	底部1/12			
11	3-4	包含層 塊	—	—	—	褐色SYR7/8	やや精良	小片	天井部外面に墨書き。		
12	6-7	包含層 塊	—	13.6	3.5	内面にヘラミガキ状の工具	沈黄褐色10YR8/3	2mm以下の黒砂粒含 有	2/12	粗製陶。	
13	2-6	包含層 塊	—	17.6	3.7	底部外面一部ヘラケズリ	褐色SYR6/6	2mm以下の砂粒含 有	7/12	底部外面に沈黄3条。	
14	6-5	包含層 塊	—	14.6	2.9	底部表面ヘラケズリ	褐色SYR7/6	精良	3/12		
15	2-5	包含層 塊	—	14.0	2.9	底部外面一部ヘラケズリ	褐色SYR6/8	1mm以下の砂粒含 有	3/12	摩滅のため調査不明確。	
16	6-6	包含層 塊	—	12.6	—	底部外面一部ヘラケズリ、内 面ヘラミガキ状の工具痕	褐色SYR7/6	精良	1/12		
17	2-7	包含層 塊	—	18.0	2.8	—	褐色SYR7/8	1.5mm以下の砂粒含 有	2/12	摩滅のため調査不明確。	
18	6-4	包含層 塊	—	17.8	2.2	—	褐色SYR7/8	やや精良	1/12	摩滅のため調査不明確。	
19	2-4	包含層 塊	—	17.8	2.5	底部外面一部ヘラケズリ	にぶい4E7.5YR6/4	1.5mm以下の砂粒含 有	3/12		
20	6-2	包含層 塊	—	17.8	2.2	ナゲ	褐色SYR6/8	精良	1/12		
21	6-3	包含層 塊	—	17.8	2.1	—	褐色SYR6/8	やや精良	1/12	摩滅のため調査不明確。	
22	6-1	包含層 塊	—	26.6	—	外表面ヘラケズリ	褐色SYR6/6	精良	口縁部1/12以下		
23	5-2	包含層 塊	—	土塊 直径 23.0	—	脚様 外表面ハケメ	褐色SYR6/6	やや精良	脚部1/12		
24	3-1	包含層 塊	—	24.8	—	ハケメ	にぶい4E7.5YR7/4	やや精良	口縁部1/12		
25	8-1	包含層 塊	—	—	体部直 径 20.5	外表面ハケメ、内面ヘラケ ズリ	にぶい黄褐色10YR7/4	3mm以下の砂粒含 有	体部4/12		
26	7-1	包含層 塊	—	26.6	—	外表面ハケメ、内面下部ヘ ラケズリ	にぶい4E7.5YR6/4	3mm以下の砂粒含 有	体部4/12		
27	5-4	包含層 塊	—	—	—	外表面ハケメ、内面ヘラケ ズリ	にぶい4E7.5YR7/5	2mm以下の黒砂粒含 有	底部3/12		
28	9-2	包含層 塊	—	21.6	—	外表面ハケメ、内面工具痕 ナゲ	にぶい4E7.5YR7/4	やや精良	口縁部3/12		
29	8-2	包含層 塊	—	—	—	体部直 径 25.0	外表面ハケメ、内面ヘラケ ズリ	にぶい4E7.5YR7/4	2.5mm以下の砂粒含 有	体部4/12	摩滅のため調査不明確。
30	4-1	包含層 塊	—	24.8	—	外表面ハケメ、内面下部ヘ ラケズリ	沈黄褐色10YR8/3	やや精良	頭部2/12		
31	8-3	包含層 塊	—	—	—	外表面ハケメ、内面工具痕 ナゲ	沈黄褐色7.5YR8/4	2mm以下の黒砂粒含 有	底部9/12		
32	5-1	包含層 塊	—	24.8	—	ハケメ	沈黄褐色7.5YR8/4	やや精良	口縁部1/12		

第1表 大林B遺跡遺物観察表



第7図 大林B遺跡包含層出土遺物 (1 : 4)

2. 遺構

調査区は湧水があり、前述した様に調査区南端では激しい。このため調査は難航したが、若干の土坑を検出している。

S K 1 は直径70cm程度の不整円形を呈するものであるが、深さは検出面から10cm程度である。土師器の杯や甕の小片が出土している。同様な土坑を調査区北端でも検出しているが、深さが20cm未満で西壁が袋状を呈している。遺物の出土は無い。

S Z 2 は、調査区南端へ向けての谷状地形の始まりに相当するものと思われ、人為的なものでは無い可能性が高い。近隣の不定形な土坑と同様に水流の作用によるものかも知れない。土師器の杯・皿・甕が若干出土している。

なお、調査区中央部に土器の集中する個所がある。直径60cmの円形に土師器の杯・皿・甕の小片が密集した状態であるが、遺構は形成していない。今回の調査で出土した遺物の大半は、ここからのものである。全て小片であり、1個体が潰れた様子もない。

3. 遺物

(1) SK 1 出土遺物

土師器の杯、甕が出土しているが、図示できたものは土師器甕1と2である。両者とも口縁部の小片のため詳細は不明であるが、口縁部から頭部にかけての肥厚が若干残る。口縁部の形状は1が端部を丸く收めるのに対し、2は端部を摘まみ上げ、外面に面をもつ。面は凹線状を呈している。

(2) SZ 2 出土遺物

3は土師器の杯、4は高杯、5～9は甕である。3は器壁が厚く、口縁端部内面に弱い沈線を施す。暗文やヘラミガキは確認できなかったが、斎宮の第1期に並行するものと考えられ、8世紀の奈良時代のものであろう。共伴する甕もそれと矛盾はないもので、5は口縁部から頭部にかけて肥厚し、7は口縁端部外面に明瞭な面をもつ。6も同様であるが、口縁部の接合が難るために極端に肥厚し、形態を崩している。9は外面のハケメが確認できず、異色である。

(3) 包含層出土遺物

10は弥生土器または古式土師器の蓋の底部で、外側の調整はヘラミガキではなくハケメである。

11は土師器の蓋の小片であるが、天井部外面に墨書きがある。複数文字または絵画の可能性がある。

12は粗製の椀であるが、内面にはヘラミガキ状の工具痕が僅かに観察される。

13～16は土師器の杯で、いずれも底部外面をヘラケズリで調整する。16の内面にはヘラミガキ状の工具痕が僅かに観察されるが、他のものに暗文またはヘラミガキは確認できない。13の底部外面には脱利な工具による3条の沈線が焼成前に施されている。

17～21は土師器の皿で、口径18cm、器高は2～3cmに収まる。摩滅のため調整が不明瞭なものもあるが、底部外面をヘラケズリするものとナデで收めるものがある。

22は盤、23は高杯の脚部片である。22外側のヘラケズリは、口縁部直下に及ぶ。23の外側にはハケメが残る。

24～31は土師器の甕、32は瓶である。27・30の底部片を除き甕は全て長胴甕である。この状況から27・30も長胴甕の底部片の可能性が高い。30の口縁部片と体部片は接合できなかったが、同一個体と判断した。口縁部は外に面をもつものであるが、28・30は水平まで大きく外反する。外側をハケメ、内面の下半をヘラケズリで調整するが、25・28・29は体部上位まで及ぶ。また、28・31のヘラケズリは浅く、工具ナデとなる。
(森川)

【註】

① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月

IV. 長五郎林B遺跡

調査区は開析谷の先端部付近に相当するが、既述したように残土により谷が埋められた現況を呈する。僅か35m²の調査であったが、谷の東側緩斜面に相当する位置から遺構・遺物を検出している。

1. 層序

調査区は逆L字状を呈する。南東から北東へ延びる部分では、前述したように厚い客土に覆われている。最大2mの客土の下が、明黄褐色粘土の検出面となり、他の層序は削平により消滅している。調査区南西端では、擾乱が検出面を削平しており、崩落の危険もあるため2m以上の掘削を断念した。ただし、谷の中心部に向かう方向であるため、検出面も徐々に深くなっていくことが想定できる。

一方、南北に延びる部分では、比較的層序が残存していた。やはり客土に覆われるが、客土は概ね1mの厚さである。その下にぶい橙色土で遺構検出を行ったが、さらに2層下に黒褐色粘質土の包含層が存在し、その下で下層検出面である明黄褐色粘土に至る。包含層までは地表から1.4m、検出面までは約1.6mである。

2. 遺構

(1) 上層検出遺構

客土直下の上層検出面では、重複する2条の溝を検出した。SD2は幅50cm、検出面からの深さ20cm未溝の小規模なものである。SD3はSD2と南岸を共有し、幅3m以上を確認したが、北岸は擾乱により消滅している。深さは検出面から40cm程度で、幅に比べ浅いものである。SD2からは常滑の陶器片等の小片、SD3からは古墳時代の壺等の小片が出土している。これにより、SD2は室町時代以降の時期が与えられる。SD3も層位からみて同等な時期と考えられ、出土した遺物は、丘陵上に分布する垣場古墳群からの混入と思われる。両者とも丘陵上から谷の中心部に向かって延びており、排水目的または流路の可能性が高い。SD3の埋土断面の観察では、SD2の他にも小規模な溝の重複がある。

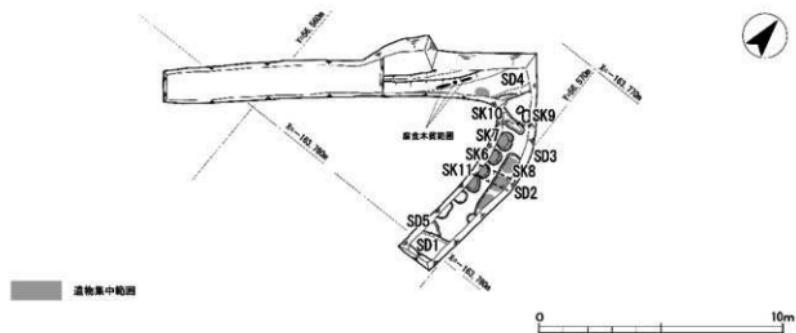
これを含め、SD2はSD3が埋没する最終形態を示すものかも知れない。

(2) 下層検出遺構

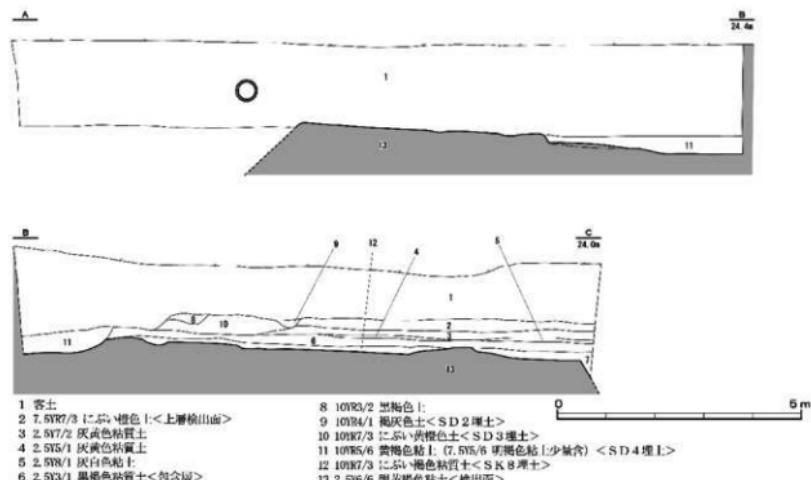
今回の調査区で中心となる検出面である。遺構は、谷の東側緩斜面に相当する位置で溝や土坑が検出された。いずれのものからも奈良時代の遺物が出土しているが、古墳時代の須恵器等の混入も多い。これは、上層検出遺構と同様に垣場古墳群からの混入と思われる。SD1は、掘削の結果自然の傾斜と判断できた。SD5もSD1と一連の可能性がある。

SD4 幅1.6m、検出面からの深さ20~30cmの比較的整った溝である。丘陵から谷の中心部へ向かって延びるが、若干弯曲するようにも見える。地形的に排水機能が想定できるが、埋土は粘土で砂粒はない。比較的多くの遺物が出土しているが、出土状況が特徴的である。溝南岸の一部に遺物が集中する。径40cm程度の円形範囲に土師器や須恵器の小片が密集した状態で埋没していた。出土した遺物は、接合の結果においても残存は劣悪で、特定の遺物が壊れた状態ではない。SD4出土遺物の大半がこの部分からの出土である。また、溝の北岸斜面では、腐食の激しい木質部を検出している。径10cm程度の円形が1個、同様な径で長さ40cm程の棒状のものが2個である。

SK6~11 SK6・7・11を含め直径40~60cm、深さ20cm未溝の小規模な土坑が調査区東側壁に沿って縦列に6基並ぶ。SK11は掘削の結果、2基の土坑に分かれた。反対側の調査区東壁で検出したSK9も同様な状況である。調査区東壁に沿うSK8は、検出時では3~4基の土坑が縦列に並ぶ状況であったが、土坑壁が不安定で、結果的に溝状のものとなってしまった。全体として、SK10を含め同様な規模の不安定な土坑が縦列に2列、約1mの間隔を空け並ぶ状況となった。遺物の出土状況も特徴的で、SK6・7・11には土師器や須恵器の小片が密集した状態で出土した。SD4と同様に接合後においても残存は劣悪な小片である。SK8でも同様な状況がみられ、3ヶ所の遺物小片の集中があり、検出当

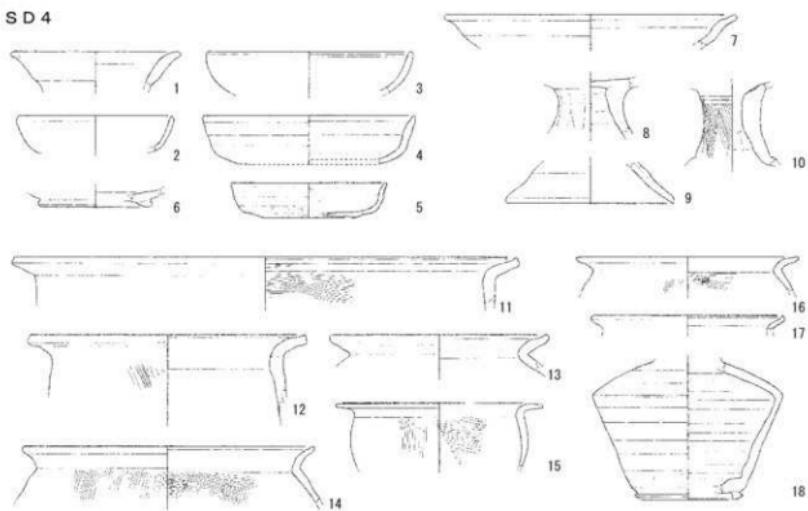


第8図 長五郎林B遺跡調査区平面図 (1:200)

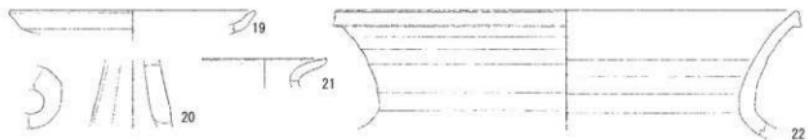


第9図 長五郎林B遺跡調査区土層断面図 (1:100)

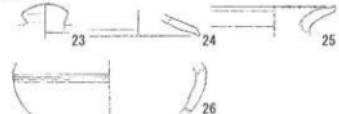
SD 4



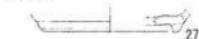
SK 11



SK 8



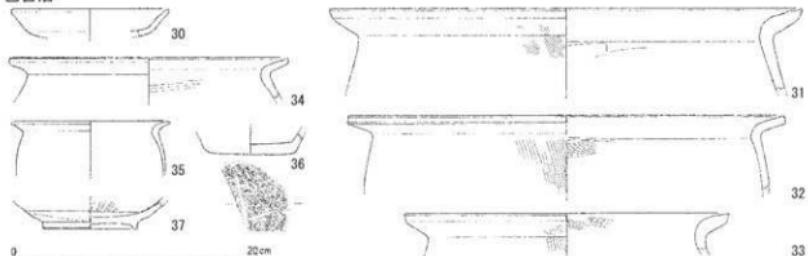
SK 7



SK 9



包含層



第10図 長五郎林臼遺跡包含層出土遺物 (1 : 4)

番号	実測 番号	遺構	器 種 形	法 面 (cm) 口幅 深さ その他の		調査法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
				口幅	深さ					
1	2-4	S94	土師器 壺	13.3	—	—	—	褐色SYR7/6	微砂粒含	口縁部1/12
2	3-3	S94	土師器 壺	12.7	—	—	—	淡黃褐色SYR8/3	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12
3	3-5	S94	土師器 壺	16.6	—	—	—	褐色SYR6/6	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12
4	1-5	S94	土師器 壺	17.3	4.0	—	底部外面未調査	に沿い褐色SYR7/4	口縁部3/12	
5	2-5	S94	土師器 壺	12.7	2.9	—	底部外面未調査	に沿い褐色SYR6/4	2mm以下の砂粒含	口縁部6/12
6	3-6	S94	土師器 壺	—	—	高台様 8.4	—	に沿い褐色SYR6/4	1mm以下の砂粒含	高台2/12
7	2-1	S94	土師器 高杯	23.6	—	—	—	に沿い褐色SYR7/4	2mm以下の砂粒・ 赤色粒含	口縁部1/12
8	3-7	S94	土師器 高杯	—	—	脚底部径 5.3	外面部へラケズリ	褐色SYR6/6	2mm以下の砂粒含	脚柱部存
9	2-3	S94	土師器 高杯	—	—	脚底部径 13.7	—	に沿い褐色SYR7/4	1mm以下の砂粒・ 赤色粒含	脚底部2/12
10	3-8	S94	土師器 高杯	—	—	脚底径 4.7	外面部取り状のハケメ	褐色SYR6/6	2mm以下の砂粒・ 赤色粒含	脚部7/12
11	1-3	S94	土師器 壺	41.4	—	—	内面部ハケメ	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12
12	2-2	S94	土師器 壺	22.4	—	—	外面部ハケメ	に沿い淡黃褐色SYR7/3	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12
13	1-4	S94	土師器 壺	17.6	—	—	—	淡黃褐色SYR8/3	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12
14	1-2	S94	土師器 壺	23.8	—	—	ハケメ	淡黃褐色SYR8/3	3mm以下の砂粒含	口縁部1/12
15	3-2	S94	土師器 壺	17.6	—	—	—	淡黃褐色SYR8/3	2.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12
16	3-1	S94	土師器 壺	18.0	—	—	ハケメ	に沿い淡黃褐色SYR7/3	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12
17	3-4	S94	土師器 壺	15.6	—	—	—	に沿い淡黃褐色SYR7/3	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12
18	1-1	S94	頭也器 壺	—	—	高台様 7.4	体外部下面下端ロクロケズリ	灰黄2.917/2	4mm以下の砂粒含	体部以下3/12
19	5-2	S911	土師器 高杯	20.1	—	—	—	褐色SYR7/6	微砂粒含	口縁部1/12
20	5-3	S911	土師器 高杯	—	—	脚底径 5.4	脚部外面部へラケズリ	褐色SYR6/6	稍良	脚柱部6/12
21	5-1	S911	土師器 壺	—	—	—	—	淡黃褐色SYR8/4	稍良	小片
22	5-4	S911	頭也器 壺	38.2	—	—	—	HN8/	稍良	口縁部1/12
23	4-6	S98	土師器 壺	—	—	脚底径 3.7	—	褐色SYR6/6	微砂粒含	偏9.9/12
24	4-3	S98	土師器 高杯	—	—	—	—	褐色SYR7/6	稍良	小片
25	4-5	S98	土師器 壺	—	—	—	—	に沿い褐色SYR6/4	1mmの砂粒含	小片
26	4-4	S98	頭也器 壺	—	—	体部径 15.9	—	灰白10N8/	稍良	体部2/12
27	4-1	S97	頭也器 壺	—	—	高台様 10.5	ロクロナザ	HN6/	稍良	底部1/12
28	4-2	S97	頭也器 壺	—	—	—	ロクロナザ	灰白BY7/1	稍良	小片
29	4-7	S99	土師器 壺	—	—	—	ナダ	褐色SYR6/8	微砂粒含	小片
30	7-3	包含層	土師器 壺	12.8	—	—	ナダ	褐色SYR6/8	稍良	口縁部1/12
31	6-1	包含層	土師器 壺	38.6	—	—	外面部ハケメ、内面部ナダ	淡黃褐色SYR8/3	稍良	口縁部2/12
32	6-2	包含層	土師器 壺	35.6	—	—	外面部ハケメ、工具ナダ	淡黃褐色SYR8/4	1mmの砂粒含	口縁部2/12
33	6-3	包含層	土師器 壺	26.6	—	—	外面部ハケメ、ナダ	淡黃褐色SYR8/3	微砂粒含	口縁部1/12
34	7-1	包含層	土師器 壺	22.8	—	—	—	に沿い褐色SYR7/4	稍良	口縁部1/12
35	7-2	包含層	土師器 壺	12.9	—	—	—	褐色SYR7/6	稍良	口縁部3/12
36	7-5	包含層	頭也器 壺	—	—	高台様 6.8	底部外面未調査	灰白10YR8/2	稍良	底部3/12
37	7-4	包含層	頭也器 壺	—	—	高台様 7.4	底部外面ロクロケズリ	灰白10YR8/2	稍良	底部4/12

第2表 長五郎林臼遺跡遺物観察表

初、数基の土坑に分かれていたことに対応する。SK9やSK10をはじめ他の土坑では、こうした状況はみられない。

3. 遺物

(1) SD4出土遺物

比較的まとまつた出土があつたが、5を除き小片である。18は須恵器の蓋で、肩の張る体部である。他は全て土師器で、1は壺、2は粗製の椀、3～5は杯、7～10は高杯、11～17は壺である。4・5の底部外面にはヘラケズリが認められず、未調整となる。口縁端部も外反気味である。それに対して3は内窓する口縁部で端部内面に沈線を巡らせる。6は蓋の高台の可能性もあるが、底部内面の丁寧なナデにより杯としておく。高杯の脚柱部は短く、外面をヘラにより面取りするが、10はハケメ状の工具による。

これらの時期としては、杯の底部外面にヘラケズリが認められないものの高杯の脚部は伸長しておらず、斎宮の第1段階に止まるものと思われ、奈良時代末の8世紀末頃と考えられる。そうした場合、1は前代からの混入となる。

(2) SK11出土遺物

19・20は土師器の高杯、21は壺、22は須恵器の壺で、全て小片である。20の脚柱部外面はヘラにより面取りされる。しかし、脚柱部の中心が内径と外径で異なり、結果として脚柱部の厚みが場所によって大きく異なる雑な作りになっている。

(3) SK8出土遺物

土師器の小片が多数出土しているが、図示できたものは土師器の蓋(23)、高杯(24)、壺(25)、須恵器の壺(26)である。26の体部には2本の沈線が巡り、その上部に櫛による刺突文が僅かに観察できる。施文順は、刺突文→沈線である。

(4) SK7出土遺物

土師器や須恵器の小片が多数出土しているが、図示できたものは須恵器の杯(27)と器台(28)である。器台の外面は波状文と沈線で装飾される。

(5) SK9出土遺物

土師器や須恵器の小片が出土しているが、図示できたものは29の土師器の皿のみである。底部外面は

ナデで調整し、ヘラケズリはみられない。口縁部の内窓傾向は無いが、器壁は厚い。

(6) 包含層出土遺物

30は土師器の杯、31～35は壺、36は須恵器の杯、37は施釉陶器である。30の口縁部は外傾するが器壁は厚く、斎宮のII-2期までに収まるであろうか。いずれにしても平安時代前期の9世紀に下るものである。土師器壺の内面もハケメによる調整と思われるが、工具の当たりが浅く、ナデと観察せざるを得ないものが多い。36の底部外面にはヘラによる深い鋭利な沈線が刻まれている。残存部のみで判断すれば、「#」と思われる。37の内面には、丸ノミ状工具による刻文が施される。おそらく折縁皿になるものと思われる。室町時代の大窯期、16世紀に下るものであろう。

(森川)

【註】

① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査』平成13年3月31日

斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月

② 前掲①と同じ

③ 濑戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市 平成5年9月30日

V. 結語

今回の調査は、両遺跡とも狭小な調査区であり、さらに調査区が遺跡の縁辺部に位置することから、両遺跡の性格を明らかにすることはできなかったが、その一端を垣間見ることはできたものと思われる。そのなかで、長五郎林B遺跡で検出した連続する2列の土坑群が注目され、「波板状凹凸面」と称されるるものに含まれるものと思われる。

波板状凹凸面は、約0.7m間隔で楕円形や円形または不整円形等の土坑が連続し、土坑底は平坦なもので、小穢を充填するものもあるという。こうした特徴は、小穢の代わりに土器片を充填したものと解釈すれば、長五郎林B遺跡の土坑群と合致するものである。波板状凹凸面は道路遺構で見つかることから、今回の調査は道路遺構を検出したものと考えられる。伊勢地域の波板状凹凸面を伴う道路遺構を集成した川部氏の分類によれば、典型的な事例ではないものの、II種C類型に該当するものと思われ、古代官道やその近辺の位置環境にある道路からは、低い位置付けとなるようである。

今回の調査原因となる事業は、宮川用水から分岐する農業用パイプラインを設置するもので、農道の下に埋設される。したがって、今回の両遺跡の調査区も農道に設定された。大林B遺跡から丘陵根野を北上し、有爾桜神社鳥居前に至る。そこで方向を変え、谷を横断して、反対側の丘陵根野を北上し、開折谷の最も奥に所在する長五郎林B遺跡に至る農道である。既述したように大林B遺跡は奈良時代の8世紀、長五郎林B遺跡はやや下って、奈良時代末の8世紀末とした。現在の農道とは大きく時期が隔たるが、第11図に示すように昭和23年撮影の空中写真にこの農道は撮影されている。これ以前に大規模な地形変更を伴う土木工事は想定し難く、この農道が奈良時代まで遡る可能性はあるものと推測される。

空中写真には、整然と並ぶ棚田が撮影されており、農作業用の道路としての機能が想定されるが、棚田が奈良時代まで遡ることは不確定である。一方、奈良時代の当地域は土器焼成坑の密集地帯である。長五郎林B遺跡が発見される契機となった調査において

ても土器焼成坑が新発見されている。こうしたことからも、周辺の丘陵緩斜面には、まだ知られていない多くの土器焼成坑が埋蔵されていることが容易に想定できる。こうした土器焼成作業に伴う資材や製品の運搬等には道路が必要であり、これもそのひとつ可能性がある。このことは、前述した川部氏の分類に当てはめた結果と矛盾しない。

この道路が土器焼成作業に伴う運搬のためのものとすれば、この連続する土坑群の正体は如何なるものであろうか。波板状凹凸面の正体については諸説あり、結論に至っていないようである。長五郎林B遺跡のものは約1mの間隔で2列並ぶ状況から、車輪の轍に起因するものと想定したい。兵庫県の吉田南遺跡からは奈良時代の車輪が出土していることもあり、当地域でもこの時期に荷車が使用されていた可能性がある。当地は粘土質であり、轍による泥濘の発生は容易に想定できる。現在でも未舗装の農道で発生する轍を起源とする水溜まりの簡易な補修を、轍で埋めることが普通に行われている。しかし、当地域では前述したように粘土質であり、轍の入手は容易ではない。多数の土器焼成坑を検出した北野遺跡では、失敗品等を捨てた土坑が検出されている。土器焼成においては、この様な廃棄物が多量に生じたものと思われ、泥濘に対する身近な補修材として利用されたのではないだろうか。ただし、この土坑群が轍の集積の結果なのか、泥濘を除去し土器片を充填する作業で生じた痕跡なのかは定かでない。補修痕の重複が無いのは、主要道路ではないため荷車の往来が限定的であったためと思われる。また、土器焼成坑が9世紀には急減するため、この道路の使用期間も短かったことも一因であろう。したがって、この程度の補修で十分使用期間に対応できたものと思われる。

なお、土器片の集積は同時期のSD4でもみられる。SD4は谷の中心部へ向かうことから理土に砂粒を含まないものの排水用として機能した可能性がある。この南岸に土器片の集積があるが、対岸には腐食した木質がみられた。調査区が谷の最も奥にあ

たる地形から、この部分で道が分岐し、西に向かう道がSD4を横断していたものと想定したい。おそらく板または丸太を簡易な橋桁として渡っていたのではないかだろうか。木質部はその痕跡であり、対岸の土器片の集積は荷重に対する構岸や橋の強化を目的とした補修と解釈したい。

この様に解釈した場合、大林B遺跡で検出した土器片の集積も同様な道路の補修とみることができる。そして土器焼成作業が終息した後は、有爾桜神社への参道を兼ねた農作業用の道路として今日まで細々と存続し続いているものと思われる。

以上、推測に推測を重ねた結果ではあるが、今回の調査は土器焼成作業に使用された名も無き道路の一端を垣間見た結果と言えるのではないだろうか。

(森川)

【註】

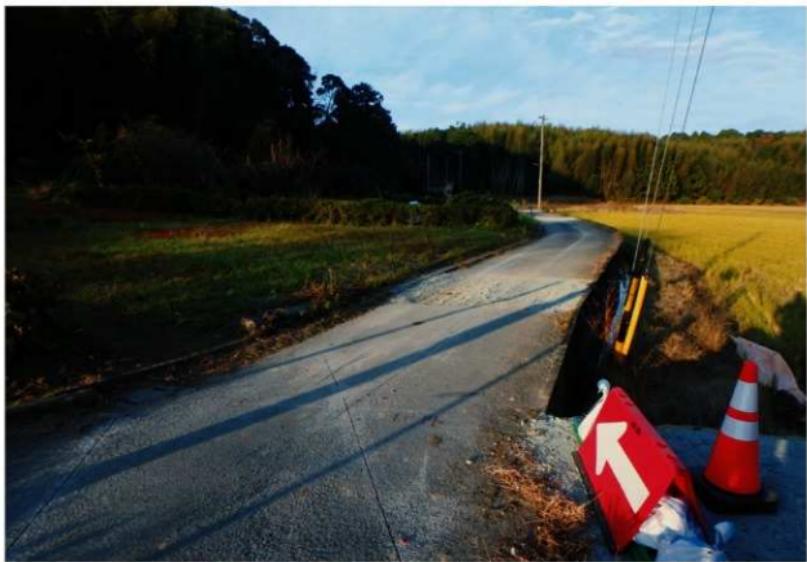
- ① 川部浩司「波板状凹凸面からみた伊勢地域の道路遺構」『Mie history vol. 21』三重歴史文化研究会 2012年5月
- ② 近江俊秀『道路誕生－考古学からみた道づくり』青木書店 2008年3月21日
- ③ 前掲①と同じ
- ④ 小山憲一「長五郎林B遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ 外山遺跡・片落C遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000.3
- ⑤ 前掲②と同じ
- ⑥ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録』1984
- ⑦ 上村安生ほか『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995.3
- ⑧ 上村安生「明和町北野遺跡の土師器生産と神宮・斎宮」『瑞垣250』神宮司庁 令和3年秋季号



第11図 昭和23年撮影の空中写真 (国土地理院空中写真USA-R2303-61 昭和23年12月17日撮影)

大林B遺跡

写真図版 1



大林B遺跡調査前風景（南東から）



大林B遺跡調査区北半全景（南から）



大林B遺跡調査区南半全景（南から）

写真図版 2



大林B遺跡



大林B遺跡出土遺物



写真図版 4

大林B遺跡



長五郎林B遺跡調査区南部全景（北から）



長五郎林B遺跡調査区西部全景（北東から）

長五郎林B遺跡

写真図版 5



長五郎林B遺跡出土遺物

写真図版 6

長五郎林B遺跡



37



26



36



28



18

長五郎林B遺跡出土遺物

報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 409

大林B遺跡・長五郎林B遺跡（第2次）
発掘調査報告

2022(令和4)年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 共立印刷株式会社
